

平塚明子（らいてう）

長谷川時雨

青空文庫

らいてうさま、

このほどお体は如何いかがで御座いますか。爽さわやかな朝風に吹かれるといかにもすがすがしくて、今日こそ、何もかもしてしまおうと、日頃のおこたりを責められながら、私は、貧乏さいふな財袋さいふよりもなお乏しい頭の濫費をしつつ無為な日を送っております。

御あたりはお静かでございますか。田舎いなかでの御生活は、どこやら不如意ふによいなように、充実されたものであろうと、お羨うらやましくぞんじます。あなたのお体にもよし、御家庭にもしみじみとした味の出た事と存じます。お子さまがたは、御自分たちのお母さまとして、日夜お傍そばに親しむことのお出来になるのを、どんなに現わし得ない感謝をもって、およろこびなされている事かと、あたくしでさえ嬉しい心地がいたします。そして風物は悠々ゆうゆうとして、あなたの御健康を甦よみがえらせていることとぞんじます。

らいてうさま、

那須野^{なすの}を吹く風は、どんな色でございましょう。玉藻^{たまも}の前の伝説^{まえ}などからは紫っぽい暗示^{なすの}をうけますが、わたくしの知る那須野の野の風は白うございます。冬など、ふと灰色がかるようにも感じられますが、わたくしには何となく白いように思われます。その白さも、薔薇^{ばら}の白^{ホワイト}ではなくて、白夜、白雨といった感じ、夏らしい清新の感がともなっております。わたくしは那須野をよく知りません。奥州^{おうしゅう}へ行つたおり、時折通りすぎた汽車の窓からあかず眺めて通つたところで御座います。あの広々した野を見ると、せせこましい、感情^{とら}にのみ囚^{とら}われている自分から解きほどかれて、自由な、伸々^{のびのび}した、空飛ぶ鳥のような勇躍をおぼえました。わたくしは山は眺めるのを好みます。海の眺めも好きです。が、野の景色ほどうしみと好きなものにはございませぬ。あかず行く雲のはてを眺め、野川の細流^{せせらぎ}のむせぶ音を聞き、すこしばかりの森や林に、風の叫びをしり、草の戦^{そよ}ぎに、時の動きゆく姿を見ることが望みでございます。むさしのに生れて、むさしのを知らぬあこがれが、わたくしの血の底を流れているのでございましょう。

いま、わたくしの目の前、小さな窓も青葉で一ぱいで御座います。思いは遠く走って、

那須野の、一望に青んだ畑や、目路のはての、村落をかこむ森の色を思いうかべます。御住居は、夏の風が青く吹き通していることと思います。白い細かい花がこぼれておりましよう。うつ木、こてまり、もち、野茨——栗の葉も白い葉裏をひるがえしておりましよう。塩原へ行く道を通っただけの記憶でも、那須は栗の沢山あるところだと思ひました。小さな、一尺二、三寸の木の丈で、ほんの芽生えなのに青い栗毬をつけていたことを思ひ出します。

昨夜は、もう入梅であろうに十五日の月影が、まどかに、白々と澄んでおりました。夏の月影の親しみぶかさ——そんなことを思ひながら眺めておりました。そちらの夜の夜は、夜鳥もさぞ鳴きすぎることでございます。月明に、夜空に流れる雲のたたずまいもさぞ眺められることで御座いましょう。そして静寂な中に、ともしびをかこんで、お子様がたのおだやかな寢息に頭をまわしながら、静かに、あなたがたは何をお読みになつていらつしやるか、何をお思ひになつてお出でであろうか、または、何についてお談話をなされてであつたらうかと、ふと何ともいえぬ懐しみが湧き上りました。

らいてうさま、あなたのお健康は、都門を離れたお住居を、よぎなくしたのでございませうが、激しい御理想に対してその欲求が、時折何ものも焼尽す火のように燃え上る

おりがございましょう。けれどもまた、長い御一生に——あなたばかりでなく、お子様गतにも——おだやかな、滋味のしたたるような今の御生活が、しみじみと思ひ出されるおりがあるうと思ひますと、只ただいま今の楽しいお団まじい樂たのしみが、尽きない尽きない、幸福の泉の壺つぼであるようにと祈られます。

三

らいてうさま、

時折来訪される人で、あなたをよく知らないで嫌いだといって、あなたの事といえよく聞きもしないで悪くキメつけるお爺じいさんが御座います、紅蓮洞ぐれんどうという人です。その実その人は、決してあなたが嫌いなのではないので御座います。その人として嫌いなはずがないので御座います。奇人ゆえ、ふとした事から嫌いにしてしまうと、もう取返しがつかなくなつて、しつこいほど意地わるく悪口をするので御座います。けれどわたくしはその人がひそかにあなたには敬意をもっていることを知っています。奇人にはちがいありませんが、洒脱しゃだつ、飄逸ひょういつなどところのない今いま様よう仙人ゆえ、讚美まつする的外はずれて、妙そに反そぐ

れてしまったのだと思います。そのくせその人が好意を示しているもので、あんまり感心した女はないのです。そして好意を持ちながら侮蔑ぶべつしきっているのです。

それとは事かわりますが、世の中には、誉めほめたいのだが、他人があんまり感心するから嫌だといったふうな旋毛つむじまが曲りがかなりにあります。口に新時代の女性を謳歌おうかしながら、趣味としては、義太夫節などにある、身を売って夫を養う妻を理想として矛盾を感じない男もあります。

近代生活思潮に刺戟しげきをうけながらも、その不安をごまかして、与えられる物質だけに満足して、倦ものうい日々をおくるのを、高等な生活のように思いこんだ婦人たちは、あなたが新しい女と目されて、社会の耳目をそぼだたせたおりに——無気力無抵抗につくりあげられた因習からの殻を切り裂いて、多くの女性を桎梏しつこくの檻おりから引出そうとしたけなげなあなたを、男が悪口する以上の憎悪ぞうおの目をもって眺めさげすみました。知識階級にある男たちまでが、好い気になつてあなたの恋愛——他人に何らの容喙ようかいをも許されないことにまで立入つて、はずかしげもなくあげつらい得々とくとくとしていました。しかしそれは日本人の癖で、ちよつと他の者が答えかねる事を——賤いやしさを、口にするのが、妙な風に感心させようとする手段で、他をはずかしめると共に自らを低くする事に平気なのです。無神経なのです。それ

をまた得々として雷同するものが多いのは情ないことなさけです。

あなたはそうした意味であらゆる人の、口の端はにおかかりでした。けれど、皆みんな、やっぱりその内心は、今様仙人とおなじ型なまだったのです。

あなたはほんによくお働きでした。あれではとてもたまりません、『青鞆せいとう』時代——「新婦人協会」時代——その間に御自分だけの生活としても、かなり複雑な——あなたの恋愛、母親となつたあなた、それは一つひとつにはなすことの出来ない、あなたの思想と密接な関係のあつたものとはいえ、時代にさきだつて事にあつたあなたには、どの一つでも勇氣と自信のいることでした。あなたのなさつた事がみんな無意味でなく、空論ではありませんでした。

もともと仙人とは空気を食べてたふうのものでしようから、今様仙人が空論を吐くのはゆるすとして、その他の人が口だけで、とやかく蔑さげすむのを憎みます。このごろ、あなたが衝しょうにあたつてお出いででないという事が、新婦人協会の内部うちわもめをおこしたというのを聞き、今更と思う思いがいたしました。

四

らいてうさま、

昨年、一昨年、一般社会に普選ということが問題とされ喧嘩かまびすしかつたおり、あなたもまた、婦人参政権を求め、婦人もまた一個の人間としての扱いを要求し、めざましい御活動で、各地を遊歴なさいましたその折にも、例の京童きょうわらんべは、あなたのあれが商売だともうしました。商売とは、昔むかし者ものの言葉でいえば、世渡りの綱で、心にもない事も言うて生活の代しろを得る——というふうに、そうした言葉で、その折にもそうした意味に用いられました。

わたくしはかなりの憤りを感じました。親譲りの財産でもないかぎり、また有ありあまつた収入の道があつて体が暇な人がするお道楽なら知らず、食べないで働けるものではありません。昔の高僧とよばれる人でさえ、人間を救いながら喜捨きしやはうけていました。与えられた食物を糧かてにして救いました。それがすこしも賤しい事でも何でもありません、立派な生活です。一本の敷島しきしまを煙にしてもそれだけの失費があり、自分の足で歩くのだといばつても、跣足はだしではあるけない世の中に衣食するものが、得るものがなくてなんで過してゆけましょう。ましてその人は、洋画家の収入の僅きんしょう少しょうなのを知っているのです。それに

幼少な子たちさえおありになるあなたの御家庭が、なかなか費えのある事を思わず、またそうした苦悩をしのんでも、志した道に精進して、婦人の覚醒かくせいに力をつくされる、社会的な、広義な愛を——新人の味わう悲痛を知ろうとしないのに、憎らしささえ覚えました。らいてうさま。あなたは、言うにいけない、人知れぬ苦い涙を、幾度お味いなさいましたろうとおいしく思います。あなたは、優しい夫君、いとしいお子たちに取りまかれて、静かに出来るだけの日を静養なさいまし。そして心身ともに以前に倍しておすこやかに、ともすれば懶惰らんだに、億劫おっくうになりがちなわたしたちのために、発奮させる原素となつて下さいまし。

五

らいてうさま、

わたくしはもう「煤烟ばいえん」を読んだおりの感想を思い出すことが出来ません。たしか寒い、雪の中を、あなたが気強さを守り通して、一人で山の方へ立っておしまいなさったという事をおぼえておるだけです。そのうち、「煤烟」の作者を、ずっと後に見かけた事

があります。大柄な、肥ふとった、近眼鏡をかけた色の白い、髪を短くかった方でした。以前からお連添つれそいになっていて藤間勘次さんが、藤間静枝の「藤蔭会とういんかい」の第一回に出られた時のことで、日本橋の常盤俱樂部とぎわで御座いました。その折にわたくしは何故となく「煤烟」は男の方から見ただけで書いたものだという気持がしました。その後、『青鞥』から尾竹紅吉さんの『サフラン』が生れ、『青鞥』が伊藤野枝いとうのえさんのお手に移ってやめられてから、『青鞥』の第二世という『ビアトリス』が新あらたに生れ、そしてその同人山田田鶴子やまだたずこさんに時折お目にかかる機会が来たときに、山田さんから伺ったはなしでは「煤烟」の作者は、幾度「煤烟」を繰くりかえそうとなすっているかと、ほほえまれるので御座いました。

あの事件——あなたのお名がわたくしにも親しみ深くなつたおり、あなたの処女作でありだろうと思う、たしか二場ばかりの脚本を載せた小さな雑誌の寄贈をうけたことがあります。が、「煤烟」の中のアナタらしい女性をとりあつた題材で、脚本そのものは平つたくもうせば、よかつたともうせませんが、わたくしは大変興味をもって読みました。そのまたあなたが禅を学びだということもそのうち承うりました。

いつぞや有楽座で、チェホフの「叔父おじワーニヤ」を素人しろうとの劇団の方たちが演じたおり、奥村さんがギターを弾く役をなさつた事がありました。あの節お招きを頂きながら田端たばたの

アトリエへうかがわなかったのを、いまでも大層残念に思っております。お宅が芝居のおけいこばになっているから見に来てくれるようにとお言ことづてのあったおり、わたくしは何ともいえぬ和氣藹々としたものを感じました。わたくしもあなたがたを取巻く劇中の一人のはやくになって、田端の画室の仮かりけいこ場へ登場して、御家庭にも親しんでみたいと思っておりますが、なかなか家を出ないのがわたくしの癖で、そうしなければと思つていゝるうちが、何んでも一番心持が緊張している時で、さあという段になると気が重くなるのがわたくしの悪い習慣なのでございます。

あなたをぜひ美人伝に入れなくてはならない方だと、わたくしがいったのを、人づてにお聞きになって「どうぞお書き下さい。だが、どんな風にお書きになるでしょう」と仰しやつたというお言ことづてを伺つたのも、もう三年も前になります。どんなふうにといつて、あなたは単に美人伝ばかりの人ではありませんから、わたくしは、あつさりど、あなたのお名を加えて自分の満足だけに致すのです。貴女の伝記は、思想家として——近代女性の母としてあるべきです。

あなたというお方は、氣持の優しい方だと思ひます。知らない方は、あなたをまるで違つたふうと思つているでしょうと思ひます。女丈夫だから、若く、ねんごろにつかえる夫

を持つたなどと推測にすぎることと言って平気なものもあります。それは大変あやまつた事で、あなたほどの方が夫から敬されたのはあたり前です。それ以上の親しみと愛が、そんな事を包んでしまうのを知らないのです。妻というものは台所の俎板まないたと同様、または雑巾ぞうきんぐらいいに見てよいものだといって憚はばからないものがあることゆえ、妻の偉さを知っているものを白眼で見て、羨うらやましきから起る嫉妬しつとにしか過ぎません。なんであなたほどのかたが、妻におもねり、機嫌ばかり取っているような、そんな男を男と見ましようか、伴は侶りよとして選みましようか。見せかけだけでしか標準をさだめ得ない、世の中の軽薄さを思わせられます。

田村俊子さんがお書かきになつた日記の中で、読んだことがあります。みじかい文のなかに、あなたという方がくつきりと浮いて見えたのをおぼえております。見つけだしましたから書いて見ましよう。

十一月廿四日、夕方平塚さんが見える。今日は黒い眼鏡がないので顔の上から受ける感じが明るい。話をしている間に深味のある張はりをもった眼が幾度も涙でいっぱいになる。この人を見ると、身体じゆうが熱に燃えている、手をふれたら焦げただらされそ

うな感じがするでしょう、とある人のいった事を思いだす。厚い口尻に深い窪みを刻みつけて、真つ白な象牙ぞうげのような腕を袖口から出しながら、手を顎あごのあたりまで持つ。といって笑うとき、ちよつと引き入れられる。私はこの人の声も好きだ。

わたくしはあなたのお顔を、天てん平びやう時代の豊ほう類きような、輪廓のただししい美に、近代的知識と、情熱に輝き燃もええひひとみ瞳を入れたようだとつねにもうしておりました。

らいてうさま、

あなたが濡ぬれそぼちて、音楽会の切符を持ち廻られたり、劇場と特約した切符を売ったり、なれない場処で、芝居の座席の割りつけに苦心してお出でなさるのを見るのはお気の毒のようにさえ思いました。くれぐれも只今の御生活を、お身体からだの滋養となさつて、御休養を切に祈ります。これからの激しい世波よなみを乗り越すには、気力も、体力も、智力の下に見る事は出来まいと思えます。御自愛なさいまし、らいてうさま。

——大正十二年七月——

附記 明治四十四年十月、平塚らいてう（明子）さんによって『青鞥』が生まれたのは、

劃期的な——女性覚醒かくせいの黎明れいめいの曉鐘であつた。このブリュー・ストッキングを標ひ榜ようぼうした新人の一団は、女性擾頭たいとうの導火線となつたのだつた。

『青鞜』創刊の辞に、

原始、女性は太陽であつた。真正の人であつた。

今、女性は月である。他に依よつて生き、他の光によつて輝く、病人のような蒼白あおしろい顔の月である。

さてここに『青鞜』は初声うづこえを上げた。

現代の日本の女性の頭脳と手によつて始めて出来た『青鞜』は初声を上げた。

女性のなすことは今はただ嘲りあざけの笑を招くばかりである。

私はよく知っている、嘲りあざけの下に隠れた或ものを。

そして私は恐れない。

(中略)

——私どもは隠されたる我が太陽を今や取戻さねばならぬ。

わたくしは新しい女である。わたくしは太陽であると、らいてうさんは叫んだ。

「新しい女」という名が、讚美、感嘆、中傷、侮辱、揶揄やゆと入り交つて、最初は青

鞆社員から社友に、それからは一般の進歩的婦人の上にふりそそがれた。

『青鞆』は最初、社会的に全然地位も自由ももたない婦人たちが、文芸を通じて心の世界に自由を求め、そこに自分の生命を見出そうと、中野初子（日本女子大学国文科出身）木内錠子（同）保持研子（同）物集和子（夏目漱石門人・物集博士令嬢）平塚明子（日本女子大学家政科出身）の五人の発起だった。

この人たちの勇気と決心は、婦人解放運動の炬火となったのだ。

『青鞆』の編輯は、最終のころは、伊藤野枝さんにかわっていた。野枝さんは後に大杉栄氏夫人となって、震災のおり×されてしまった。

この附記は、らいてうさんの出発点をよく知らぬ人のために、蛇足かもしれぬが記しておく。

青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

1993（平成5）年8月18日第4刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年2月発行

初出：「婦人画報」

1922（大正11）年9月

※編集部が付けた註は除きました。

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2007年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

平塚明子（らいてう）

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>